

九歌試譯

目加田， 誠

<https://doi.org/10.15017/2332847>

出版情報：文學研究. 58, pp.1-15, 1959-07-30. 九州大学文学部
バージョン：
権利関係：



九歌試譯

目加田 誠

九歌は楚辞の中でも最も美しいものだと思うが、それでいて、これほど解りにくいものも無い。

第一にその作者は、古来屈原（紀元前三四一——二七八？）だということになつてはいるが、近頃それに疑をもつ人がないではない。それはこの九歌というものを、全く楚国の民間祭祀の歌と見るのである。胡適などは九歌を、文学史的に楚辞の来源となるものと考え、九歌を屈原伝説とは全然關係がないとし、之を以て最も古い湘江地方の宗教歌舞とする。但し、胡適は、屈原という人物の存在をすら疑はうとしたのだから仕方がない。然し屈原の存在を疑う彼の説は決して充分な根拠はないので、一種好奇の説として今では見られるだけであろう。

漢の王逸はいう、「九歌は屈原が作ったのである。昔楚国の郢都から南の方、沅水、湘水のあたりでは、その風俗が鬼神を信じて祭祀を好んだ。その祭にはきつと歌舞をして神々を楽しました。屈原は放逐されて、この地方にかくれ、憂愁にとざされていた間に、時々出てはこ

の地方の人の祭祀歌舞を見たが、その歌詞が鄙陋なので、この九歌の曲を作り、上は神に仕える恭敬をのべ、下はそれによつて自分の冤罪をあらわし、之に托して諷諭した。故にその文章は一樣でなく、章句もいりまじり、趣旨もさまざまになつてゐる」といふ、九歌を屈原の創作と見ているようである。

朱子は又いう、「九歌は屈原が作ったのである。昔楚国の郢都の南方、沅水湘水のあたりでは、その風俗が鬼神を信じて祭祀を好んだ。その祭にはきつと巫覡に音楽歌舞をさせて神を楽しました。蛮荆といわれるこの地方の鄙陋な風俗のこととて、歌詞がいやしい上に、人と神との間のことに、或はけがらわしく、淫らなことがまじつて居らぬわけにはゆかなかつた。屈原が放逐されて、之を見て感ずるところあり、些かその詞を更定し、あまりひどいものを去り、又その神に仕える心によつて、君に忠に國を愛し、眷恋やまぬ思を寄托した。従つてその言葉は男女のなれなれしさにまぎらう点も無いでは無いが、世

君子は反つてこゝに汲み取るものがあるのである。」と。尚これに注して曰く、「此の巻の諸篇は皆神に仕えて報いられず、而もその敬愛を忘れぬ心を以て、君に仕え合はず、而も忠誠を忘れぬ心になぞらえているので、特に屈原の懇切な心持を見るに足るのである。旧説はその点を誤つているので、今すべて改めた。」と。

これでは屈原以前に九歌の原詩があつてそれに屈原が手を入れて改作したことになる。こうして同じく屈原の手になつたものとするにも、或はその創作とし、或はその更定と見る相違はあるのである。

近來の中国では、この九歌を、元來民間祭祀の歌で、屈原が手を加えたにしても、その主要なものは人民の手になつた、とする見方が一樣に行われている。

たとえば高亨・黄孝紓の選注楚辭選（古典文学出版社）には、「九歌は楚国民間の祭祀の歌である。古代にはもともと巫風が行われ、楚国及楚に併合された陳、呉、越等の国の巫風はことに盛んだつた。

巫は人と神との交流を任務とし、歌舞を善くした。故に巫風はある程度文芸の發展を推進していたのだ。九歌はこのようにして生れた。九歌の中には楚国の人民の生産に対する熱愛と幸福の追求とを反映し、また彼らの国のために犠牲になつた者への崇敬を反映している。

そして語言の清新秀麗さ、感情の眞実さにあふれてい

ることは、更に作者の人に過ぎたる芸術手腕を証明する。屈原がもし手を加えたにしてもその功は民間の無名佳人に主として帰すべきだろう」とある。（人民の生産に対する熱愛云々は何をさしているのかよくわからぬが）。

又馬茂元選注楚辭選（人民文学出版社）にも、「九歌は原來楚国南部に久しく流行した一組の民間祭祀の樂歌であり、屈原の加工改作を経て創り出された独特の體製のもの」とし、楚国人民の宗教の一種、巫風の具體的表現であり、その深長な感傷の情緒、纏綿哀怨の思は、正に屈原の放逐中の心情そのものの自然の流露である」と言つている。（放逐中云々は後にのべる郭沫若の説に反対するもの）。

九歌を屈原に關係ないものとした胡適の説に賛成していた人に陸侃如、游国恩があつたが、陸侃如は文学の發展史の上から、九歌を離騷等の前の時代において考へたのだが、今その「中国詩史」に於ては、「九歌はたとえ之を潤節した人があるにしても、その主要なるものは民間から來た。この楚国各地の民間祭歌を、大体漢代の初に採集して、九歌という古い名前を加えたものである」と言つているし、游国恩は、九歌の中に車戰の描写があるので、戦国以前、春秋の時代のもの、と説を立てたが、之は後、郭沫若によつて否定された。そして今では「九歌をはじめ民間の口頭の創作で、後になつて屈原の写定、

或は修改を経たもので、一面にはその原形が保存され、一面には屈原による適当な修改が加わっている」と言い出している。(こうなると結局朱子の説に近いわけである)。

次に九歌を屈原の手による創作又は修改とする説にも、それが屈原の生涯のどの時期に当るのか、即ち彼の放逐以後とする旧来の説と、之に対する反対の説とがある。郭沫若の如きは、「私の見るところ九歌はやはり屈原の作品である。そしてこの愉快な作品は、彼の早年得意な時代に作られたので、放逐後のものではない」(屈原研究)とする。游国恩も亦郭沫若の説に従つて、九歌にはその内容に少しも放逐後の様子が無い。又その歌の背景も、沅湘地方に限らず、北は黄河(河伯)、西は巫山(山鬼)に至り、又天神地祇人鬼に及んで範圍が広く、又組織がある。之は放逐以前に作られたものを、後に整理したものであらうと考えている。

之を屈原壯年の作とする考の根拠の一つとして、九歌の中に、屈原放逐後の憂愁がこめられていないと見る説があるのだが、果して郭沫若のように之を「愉快な作品」といふべきだろうか。こうなると読者のうける印象の相違となつてしまふが、私には決して明るく楽しいものとは思えない。その理由は後で訳出して説明できるだらう。九歌の中に「君を諷諫する意がある」とか、「忠君愛國の意が含まれている」とかいう旧説は今更問題としないで

も、この九歌の歌詞に作者の深い憂愁を見るか否かは、この文学の觀賞に當つて重大な問題とならう。

星川清孝氏は「われ／＼はむしる屈原の加筆はありうるとしても、王逸以来の諷諫寓意の説は信ぜられないと思ふ。九歌のどの篇にも、楚の君主に対する忠誠諷諭の意はなく、単に楚国民間宗教樂歌であり、屈原以前に存在し、屈原或は当時の無名詩人の手で現在の形に固定せしめられたものと推定する。」と言われるが、忠誠諷諭といふのではなく、こゝに作者の、求めるもの、得られず、期待の充たされぬ一種切ない淋しきの情緒を各篇の中に私は見ずにいらぬのである。

次には九歌という名称についてである。楚辞の九章は九篇の詩をあつめたもの、九辯も九篇から成つてゐるのに、九歌に限つて十一篇の詩から成る。十一篇にして九歌とはこれ如何という問題である。

之に対しても、二つの見方がある。一つは、九歌という名は古の歌曲の名で、詩篇の数には関係ないとする説。一つは、十一篇のどれかを合併或は除外して、九つの数に合せようとする諸説。

先づ九歌を古代の歌曲とするのは、現に離騷にも、啓九辯与九歌兮。とか、奏九歌而舞韶兮とかあり、天間にも九辯九歌ということが出てゐるが、これらは遠い夏の世の樂歌として言われている。山海經にも(大荒西經)

夏后開上嬪于天、得九辯與九歌以下とある。周礼に（春官大司樂）も九歌之歌、九磬之舞とあり、大禹謨には、水火金木土穀惟脩。正徳利用厚生惟和。九功惟叙。九叙惟歌。戒之用休。董之用威。勅之以九歌。俾勿壞。とあり、之は六府三事の政績を賛美したものととなつてゐる。

昭二〇左伝に八風九歌、昭二五左伝に九歌八風とあり、これらの書物は往々あまり信用出来ぬにしても、とにかく九歌というのは古い歌曲の名として言われ、楚辞の九歌とは全く違ふものである。従つてたゞその旧名をこの楚の民間祭歌に用いたにすぎぬ、九は実数でなく、篇数に関係ない、とする説（楊慎の説、游国恩等も之をとる）。之に賛成する人は多くて、郭沫若も、九は或は糾で、数目ではない。糾ならば纏綿婉転の意であるという。（文懐沙なども郭説をとる）

之に對して九歌が古い曲名であるにせよ、楚辞の九歌は本来九篇であるのが当然とする説をとる人は、この十篇を如何にして九の數に合わそうかと工夫する。

王夫之は礼魂一章を送神曲としたが、あとは十篇だからまだ九の數には合わぬ。

黄文煥は山鬼・国殇・礼魂を合せて一つとした。（林雲銘も同じ。山鬼は正神ではないし、国殇・礼魂は人が死んで新に亡者となつたもの故、これらを合せて一つとする。）

蔣驥は湘君と湘夫人とを合せて一つ。大司命と小司命とを合せて一つ。乃で九篇となる。

そのほかいろ／＼あるようだが、王闈運が礼魂は各篇の乱であり、国殇は古い記録にはなく、新に増したもので、この二つは數に入れぬ。山鬼までを以て九歌とする、というのは可成り肯かれる。

聞一多は九歌はすべて東皇太一をまつるものとし、最初は迎神曲、最後の礼魂は送神曲。中間の九篇が神を樂しめる九つの歌とする。

楚辞の九辯が九つの章から成つてゐるのは、九辯という古い名に合せて九篇としたものと思う。九歌も、もと／＼九が実数で無かつたとしても、その古名をとつて名付ける場合、一応九篇の歌が並べられたと考えるのは自然である。国殇と礼魂とを除外して、あとを九篇と數える王闈運の考えに私は一番引かれる。

結局朱子が弁証に

「篇は九歌と名づけて實は十一章あるは、蓋し晬るべからず。旧、九を以て陽數をなすは尤も衍説たり。或は疑う猶ほ虞夏の遺声ありと。亦考ふ可からず。今姑く之を闕いて、以て知者を俟つ。義の急なる所に非るなり」と言つてゐるとおりであろうが。

さて九歌を現代語に訳そうとしたものに郭沫若・文懐沙等がある。わが国では古く鈴木博士、近くは青木博士

がある。鈴木氏は古風な雅語をもつて邦訳し、青木氏は無雑作な口語体で訳されている。之らの訳者の一番苦心する所は、九歌というものを巫の歌と見ることは一致しても、その歌詞が、ある時は神そのもの（に扮した巫）のことばとなり、ある時は神を迎え送る巫のことばとなる。神が自分の身の上を歌うかと思ふと、忽ち客観的な立場からその場のさまを歌うことばになる。それが入りまじつていて、甚だ解釈に苦しむ。乃で陳本礼の如きは「九歌は皆楚俗の巫覡が歌舞して神を祀る楽曲である。周礼春官司巫に巫の政令を掌る。男を覡と曰い、女を巫と曰うとあり。楚において巫を以て神を祀るのも亦周の旧いしきたりに従つてゐるのだ。とくにその詞句が鄙しかつたので屈原が別に新曲を撰したのである。然もその趣意には諷諫の心が多かつた。後の人は深くもその故を察せず、漫りに楚の風俗が鬼を信じ祀を好んだことを曰う。（中略）私が考えるのに、九歌の楽には男巫が歌うものもあれば、女巫が歌うものもあり、巫覡が共に舞つて歌うものもあれば、一人の巫が倡えて衆巫が之に和するものもある。云々」。

といつてゐるのは最も当を得ていると思われる。ただし各篇のどの章を誰がうたうか、などということは、何にも記載がないから、実際には仲々分ちにくい。青木正児氏の訳に於ては、東皇太一は祭巫と神巫。雲中君は神

巫の独唱、湘君は主祭の男巫と女巫の合唱、湘夫人は祭巫と神巫、大司命も神巫と祭巫。少司命は主祭と助祭とのかけあいの間に神巫が登場し、東君河伯はいづれも神巫と祭巫、山鬼は山鬼に扮する女巫の独唱、国殇は男巫独唱、礼魂は巫女の一隊の合唱として、それらの歌の文句の歌者を定めてある。非常に面白い試みではあるが、果して当つてゐるかどうかは解らない。ちがつた割当ても出来るのである。もとゞ九歌に演劇的要素が多分に認められるので、この点にもとずいて九歌を古代の歌舞劇として、新に組み立てゝみたのが聞一多である。（郭沫若は湘君と湘夫人に於てのみ、男神と女神の二人の対唱とした）。

こうした試みは非常に面白いし、又事実そのようにして唱われたらうと想像がされるのであるが、その実際について何ら記録がないとすれば、たゞ推定にすぎぬので、その推定は楽しくもあり、自由でもあるが、こゝには私は一応原文だけをそのまゝに訳してみる。恐らくその意味から見て、この中に主客の立場がいろいろ交錯してゐると思われるが、之は又或はこの音楽が奏される間に、神に扮した巫が現れて舞い、その間々に祭りの情景などを歌う説明的な文句があつたとしてもよい筈だとも考えられる。

太一はもと星の名。天上の尊神。その祠が楚の東にあるから東皇という云われる。楚國に於ける至上の神である。この篇は祭に音楽を奏し、供え物をささげ、巫が舞をまうりさまがのべられる。

吉日兮辰良

よき日よき辰

穆将愉兮上皇

敬しんで東皇を樂しめまつる

撫长剑兮玉珥

長劍の玉の鐔を撫でれば

璆锵鸣兮琳琅

音も美しく佩玉鳴る

璠席兮玉璜

たまむしろの席を玉もて圧え

盍将把兮瓊芳

うるはしい花を束にしてもち

蕙肴蒸兮蘭藉

蕙に包んだ肉には蘭をしき

奠桂酒兮椒漿

桂の酒と椒の飲物を奠え蒸め

揚枹兮拊鼓

枹をあげて太鼓をうち

疏緩節兮安歌

拍子ゆるくしづかに歌い

陳竽瑟兮浩倡

管絃をつらねて盛んに唱う。

靈偃蹇兮姣服

神の憑つた巫は美しい衣着て

芳菲菲兮滿堂

香は高く堂に満ち

五音紛兮繁會

樂の音賑やかに入りまじり

君欣欣兮樂康

神はうれしげに樂しみたもう

二、雲中君

雲の神をまつる歌。巫が装束を飾つて、神を降す。神は降つたが忽ち遠く去つて了い、嘆息して之を思ふ。

浴蘭湯兮沐芳

芳しい蘭湯に浴し沐い

華采衣兮若英

彩美しい衣に杜若を飾る (巫の装束)

靈連螭兮既留

雲神はうねりつゝ来て留まり

爛昭昭兮未央

きらゝかにかがやいてやまぬ

蹇将憺兮壽宮

あゝわが祭の庭に安んじて

與日月兮齊光

日月と共に輝きませ

龍駕兮帝服

龍車にのり天帝の衣着て

聊翔遊兮周章

しばしあまかけりめぐりたま

靈皇皇兮既降

神は煌々として降つたが

猋遠拳兮雲中

忽ち雲中とおく飛び揚つた

覽冀州兮有余

冀州の外まで見渡して

橫四海兮焉窮

四海のはてまで行くのである

思夫君兮太息

この君を思うて太息し

極勞心兮慄慄

心なやまし胸をいためる

三、湘君

王逸は湘君を湘水の神とし、湘夫人は、堯の二女で、舜の妃となつた娥皇・女英だとする。舜が南征し

て蒼梧で死んだとき、この二妃はあとを追つて来て、沅湘の間で水に身を投げて死に、湘夫人となり、つたという。或は韓退之などは、湘君は娥皇であり、湘夫人は女英であり、どちらも女神であるとした。朱子はこの説をとつている。然し、歌詞からして、やはり湘君は男神、湘夫人は女神と見るのがよいようである。私は特に「湘君」の歌を、男神が女神を思ふ歌として解して見た。

君不行兮夷猶 蹇誰留兮中洲
美要眇兮宜脩 沛吾乘兮桂舟
令沅湘兮無波 使江水兮安流
望夫君兮未來 吹參差兮誰思
駕飛龍兮北征 遭吾道兮洞庭
薛荔拍兮蕙綯 蓀橈兮蘭旌
望涔陽兮極浦 橫大江兮揚靈

君ためらうて来まさぬは
あゝ誰が中洲に引き留める
美々しく着飾つて
桂の舟で私はゆく
沅湘に波立たず
江水もしづかに流れよ
かの君をまでと来まさず
洞簫吹いて思ふは誰
飛龍に駕して北にゆき
洞庭に道をめぐらす
薛荔を舟壁にかけ、蕙を結んで
蓀のかい、蘭のはた
遠く涔陽の浦をのぞんで
大江を横切つて靈光を揚げる

揚靈兮未極 女嬃媛兮為余太息
橫流涕兮潺湲 隱思君兮陴側
桂櫂兮蘭枻 斲冰兮積雪
采薛荔兮水中 搴芙蓉兮木末
心不同兮媒勞 恩不甚兮輕絕
石瀨兮淺洑 飛龍兮翩翩
交不忠兮怨長 期不信兮告余以不聞
鼉騶驚兮江皋 夕弭節兮北渚
鳥次兮屋上 水周兮堂下
捐余玦兮江中 遺余佩兮澧浦

靈光を揚げても届かず
侍女はやさしく私のために吐息する
さめく／＼と涙を流し
君を思うて胸を傷める
桂の櫂に蘭のふなばた
氷雪をきりつゝ進む
山の薛荔を水中にさがし
池の芙蓉を梢に求めるように
心が合わねば仲人も空しく
愛薄ければ離れ易い
淺瀨はさら／＼流れ
飛龍はひらひら飛ぶ
交り厚からねば怨み長く
期に信なく、暇がないと君はいう
朝に江の畔を馳せ
夕に北の渚にとゞまる
鳥は屋上にとまり
水は堂の下をめぐる
わが玦を江中にすて
わが佩を澧浦にすて

采芳洲兮杜若
將以遺兮下女
時不可兮再得
聊逍遙兮容與

芳草の洲の杜若をとり
せめて君の侍女に送ろう
時は再び得られねば
しばしさまよつて心を慰めよ

四、湘夫人

女神が男神を思ふ歌として解する。

帝子降兮北渚
目眇眇兮愁予
嫋嫋兮秋風
洞庭波兮木葉下

上帝の御子、北の渚に降り立
ち給う
見る目かすかに、心かなしむ
そよ／＼と吹く秋風に
洞庭波立ち樹々の葉散る

登白蘋兮騁望
與佳期兮夕張
鳥何萃兮蘋中
暈何為兮木上

白蘋の岸に立つて遠く眺める
君と約して夕の設けもしたも
のを
木にすむ鳥の水草にあつまり
魚網を楫にかけるような空し
さ

沅有芷兮澧有蘭
思公子兮未敢言
荒忽兮遠望
嫋流水兮潺湲

沅水に芷あり澧水に蘭あり
かの君を思へども口に出さず
恍惚としてとおく望めば
流水のさら／＼と音するばかり

藥何食兮庭中
蛟何為兮水裔
朝馳余馬兮江皋
夕濟兮西澨

何とて藥の庭に来て食み
蛟龍の岸辺にあるがごとき
朝わが馬を江畔に馳せ
夕べ西の岸辺に渡る

聞佳人兮召予
將騰駕兮偕逝
築室兮水中
葺之兮荷蓋

よき人のわれを招くときけば
車を馳せていざ使者と共にゆ
家を水中に築き
蓮の葉もて屋根を葺こう

蓀壁兮紫壇
播芳椒兮成堂
桂棟兮蘭橑
辛夷楣兮葍房

蓀の壁、紫貝の中庭
芳しい椒を堂にしき
桂の棟、木蘭の橑
辛夷の楣、葍の部屋

罔薜荔兮為帷
擗蕙櫜兮既張
白玉兮為鎮
疏石蘭兮為芳

薜荔を結んで帷とし
蕙をさきつらねて張り
白玉を席の庄へとし
石蘭をしいて香をつけ

芷葺兮荷屋
繚之兮杜衡
合百草兮實庭
建芳馨兮廡門
九嶷續兮並迎

荷葉の屋根に芷をふき
之に杜衡をまといつける
百草を庭いつばいにみだし
香り高い花を廡や門につめば
九嶷の山の神々共に迎え

靈之來兮如雲

神靈は雲のように群り来よう

捐余袂兮江中

わが袖を江中にすて

遺余襟兮澧浦

わが単衣ひとえを澧浦にすて

蹇汀洲兮杜若

なぎさの杜若を手折つて

將以遺兮遠者

さらば遠い人におくろう

時不可兮驟得

時はたびたび得られねば

聊逍遙兮容與

しばらくさまようて心を慰めよう

五、大司命

大司命と少司命とはどちらも星の名で、寿命を司る神。この歌は男神が女神を思ふ歌らしい。

廣開兮天門

天の門かど広く押し開き

紛吾乘兮玄雲

むらがる黒雲にわれ乗つて

令飄風兮先驅

つむじ風に先駆けさせ

使澗雨兮灑塵

驟雨に塵を清めさせる

君廻翔兮以下

君はかけめぐりつゝ天降る

踰空桑兮從女

空桑の山越えて汝おなごについて私

紛總總兮九州

数限りない世の民の

何壽夭兮在予

寿命は我手にあるものを

高飛兮安翔

高く飛びしづかにかけり

乘清氣兮御陰陽

清氣に乗り、陰陽を御し

吾與君兮齊速

そなたと疾くつゝしんで

導帝之兮九坑

天帝を九州の山に案内しよう

靈衣兮被被

神衣は長く垂れ

玉佩兮陸離

玉佩はきらめく

志陰兮志陽

陰となり陽となるも

衆莫知兮余所爲

わが為す所とは誰も知らぬ

折疏麻兮瑤華

神麻の玉なす花を折り

將以遺兮離居

離れた人に贈ろうか

老冉冉兮既極

老いは次第に迫つてくるにかえつて君はとおざかる

不寢近兮愈疏

龍に乗つてりんくくと

乘龍兮鱗鱗

高く馳せて天に至る

高馳兮冲天

桂枝を結んで長く佇み

結桂枝兮延佇

あゝいよよ思つて心はかなし

羌愈思兮愁人

心かなしむもすべもなや

愁人兮奈何

せめて君いつまでも恙なければ

願若兮無虧

もとより寿命に定めあり

固人命兮有当

合うも離るゝも我にはよらぬ

孰離兮可為

六、少司命

少司命は女神らしく、大司命の男神を思つて歌うものとして解する。

少司命は女神らしく、大司命の男神を思つて歌うものとして解する。

秋蘭兮繁蕪

羅生兮堂下

綠葉兮素枝

芳菲菲兮襲予

夫人自有美子

蓀何以兮愁苦

秋蘭兮青青

綠葉兮紫莖

滿堂兮美人

忽獨與余兮目成

入不言兮出不辭

乘回風兮載雲旗

悲莫悲兮生別離

樂莫樂兮新相知

荷衣兮蕙帶

倏而來兮忽而逝

夕宿兮帝郊

君誰須兮雲之際

秋蘭と繁蕪と

堂下につらなり生え

緑の葉に白い枝

香はたかく我身にまとう

人皆すべてよき子のあるに

何とて君は愁いたもう

秋蘭は青々

緑の葉に紫の莖

よき人は堂に満つるに

ふと私にばかり目くばせした

君は来るにも言わず去るにも

言わず つむじ風に乗り雲の旗立て、

悲しみは生きながら別れるに

ますものなく 楽しみは新らたに恋を得たに

荷の衣、蕙の帯

君は忽ち来て忽ち去り

夕べは天帝の郊野に宿る

誰を待ちます雲の間に

與女沐兮咸池

與女髮陽之阿

望美人兮未來

臨風悅兮浩歌

孔蓋兮翠旌

登九天兮撫彗星

竦長劍兮擁幼艾

蓀獨宜兮為民正

七、東君

日の神。太陽が東にのぼり、空をわたつて西に沈む。巫が音楽を奏して之をまつるさま。陽がのぼるうとしてたゆたうさまが美しい。

そなたと髪を咸池に洗い

九陽の丘に乾かそうと

よきひとを待てど来まさず

風に向つてわびつゝ歌う

孔雀の車蓋に翡翠の旗

彗星もて空うち払い

長劍を執つて美女をかい抱く

君こそまこと民のかしらとな

るにふさわしい

噉將出兮東方

照吾檻兮扶桑

撫余馬兮安馭

夜皎皎既明

駕龍輅兮乘雷

載雲旗兮委蛇

長太息兮將上

朝日いま東の方にさしのぼり

扶桑からわが欄干を照らして

いる 余が馬を撫でてしずかに行け

夜はしら／＼と明けはなれた

龍の輅に雷の車

雲の旗なびかせ

吐息して上りつゝ

心低徊兮顧懷
羌声色兮娛人
觀者憺兮忘歸

心ためらい、見返れば
あゝ楽の音は楽しくて
観る者見とれて帰るを忘る

絢瑟兮交鼓

瑟の糸締め、鼓を打ち交わし

簫鐘兮瑤簾

鐘撃つて懸木を揺がし

鳴籥兮吹竽

横笛ならし、竽吹けば

思靈保兮賢娉

さても巫女の美しさ

翺飛兮翠會

翠のように軽く挙り

展詩兮會舞

うた唱い、ともに舞い

應律兮合節

ふしにつれて拍子も合えば

靈之來兮蔽日

神は日を蔽うて群がり降る

青雲衣兮白霓裳

青雲の衣、白虹の裳

拳長矢兮射天狼

長矢を拳げて天狼（星の名）
を射

操余弧兮反淪降

わが弓を操つて西に沈みつゝ

援北斗兮酌桂漿

北斗の杓に桂漿を酌み

撰余轡兮高馳翔

手綱をとつて高く馳せ

杳冥冥兮以東行

まくらき闇路を東へ廻る

注 扶桑はこゝは地名。

簫は擗。撃の意。

瑤は搖の仮借か。

蘄は鐘や磬をかける木。

八、河伯

黄河の神。詩中「女」というのは仮りに女神をさすものとして訳す。

與女遊兮九河

そなたと九河に遊べば

衝風起兮橫波

つじ風起つて荒波立つ

乘水車兮荷蓋

水車にのつて荷葉のほろかけ

駕兩龍兮驂螭

双竜にひかせ螭を驂に

登崑崙兮四望

崑崙にのぼつて四方を望めば

心飛揚兮浩蕩

心は高く揚つてはてしも無い

日將暮兮悵忘歸

日は暮れかゝるに帰るを忘れ

惟極浦兮寤懷

遠い浦わを顧みおもう

魚鱗屋兮龍堂

魚鱗の屋根に竜の堂

紫貝闕兮朱宮

紫貝の門觀に朱の宮居

靈何為兮水中

神は何とて水底に居ます

乘白龜兮逐文魚

白龜にのり文魚従え

與女遊兮河之渚

そなたと黄河の岸に遊べば

流漸紛兮將來下

流水みだれて下り来る

子交手兮東行

君は手をとりに交して東に去る

送美人兮南浦

よき人を南浦に送れば

波滔滔兮來迎

波とうとうと来りむかえ

魚鱗鱗兮騰予

魚はむらがつて私を送る

注 九河は古、黄河が九つに分れて流れたところ
寤懐は願懐か。

九、山 鬼

山の妖精がおのれに背いた男を慕つてうたう歌。

若有人兮山之阿

山蔭かげに人あるけわい

彼薜荔兮帶女蘿

まさきのかずらを衣に着

既合睇兮又宜笑

ねなしかずらを帯にしめ
思いをこめたながしめに
につこり笑う美しさ

子慕予兮善窈窕

あなたはこの婀娜な姿を
愛していて下さつたのに

乘赤豹兮從文狸

赤い豹にのり
斑まだらの狸をつれ

辛夷車兮結桂旗

こぶしの車に
桂の旗

被石蘭兮帶杜衡

石蘭の衣に
杜衡の帯

折芳馨兮遺所思

恋しい人におくろうと
香り草折つて来は来たが

余処幽篁兮終不見天

山奥深い竹藪に

路險難兮独後來

かくれ住む身の空も見えず
路げはしさに

表独立兮山之上

ついでおそなわつた
たゞひとり
山の頂に立てば

雲容容兮而在下

雲は足もとに
わき起り

杳冥冥兮羌昼晦

あたり真闇く
昼も見えぬ

東風飄兮神靈雨

東風は吹きめぐり
神靈は雨をふらす

留靈修兮憺忘歸

あの方をこゝに引きとめて
いつまでも帰すまいと
思つたに

歲既晏兮孰華予

年をとつてしまつた私に
誰が恋の花を咲かせて
くれよう

采三秀兮於山間

仙薬を山の間はさまに
とれば

石磊磊兮葛蔓蔓

岩根あらく
葛ははびこる

怨公子兮悵忘歸

あの方を怨んで
いつまでも立ち去りかねる

君思我兮不得聞

私を思つては下さつても
もしやお暇がないのかしら

山中人兮芳杜若

山奥に住居する身は

飲石泉兮蔭松柏

かぐわしい杜若をかおらせ
清い泉の水をのみ
松柏のかげにいこう

君思我兮然疑作

あの方は私を思つては
もしやお疑いでも起つたか
下さるが

雷填填兮雨冥冥

雷はごろごろ

猿啾啾兮又夜鳴

雨はくらく降る
猿はかすかに叫び
猿は夜鳴き

風颯颯兮木蕭蕭

風さわがしく

思公子兮徒離愛

樹々はざわめく
あの方を思うて
やるせなく憂にしづむ

注 三秀、一年に三度花さく靈草。之を探つて自分の容色の衰えを補はうとするのである。又、或は狢に作る。さるの風。

一〇、國 殤

國の為に戦死した英霊。殤とは祭る人の無い亡魂。

操吳戈兮被犀甲

吳の戈ほこを操り犀皮さいの甲よろいを着て

車錯轂兮短兵接

戦車はいりまじり刃は打ち合

旌蔽日兮敵若雲

旗いは日を蔽うて敵は雲の如く
降る矢の中に先を争う

凌余陣兮躐余行

わが陣を侵しわが列を蹂躪し

左驂殪兮右刃傷

左の驂そとうまはたおれ右も傷いたが

埋兩輪兮繫四馬

兩輪を埋めて四馬を放たず

援玉枹兮擊鳴鼓

枹ぼちもて進軍の太鼓を打ち

天時墜兮威靈怒

天運利あらず鬼神は怒り

敵殺尽兮棄原野

わが軍全滅して原野に
棄てらる

出不入兮往不反

出でて戻らず往いてかへらず

平原忽兮路超遠

はてなき平野、はるげき路に

帶長劍兮挾秦弓

長劍を帯び秦弓をたさみ

首身離兮心不懲

身首は離れても心は悔いぬ

誠既勇兮又以武

まことに勇ましく又武けく

終剛強兮不可凌

あくまで剛強、犯すべからず

身既死兮神以靈

身は死しても神は滅びず

魂魄毅兮為鬼雄

魂魄毅然たり亡霊の雄となる

十一、礼 魂

之はすべて祭りの終りに奏するものかと思われる。

成礼兮會鼓

祭礼備わり、太鼓をはやめ

傳芭兮代舞

花を伝えて代るがわる舞う

娉女倡兮容與

美女はうたい、ゆるやかに舞

春蘭兮秋菊

春は蘭、秋は菊

長無絶兮終古

とこしえにこの祀りの絶ゆる

ことなし

さて、こう訳して見たところで、もう一度考える。

東方太一は天上の尊神をまつる巫の舞、楽の音、おそなえのかずかず。神は巫にのりうつて、楽しく祀をうけるありさま。

雲中君は巫が美しく着飾り、身を潔めて、雲の神をまつる。神は祭祀の場に降つたが、忽ちにして空高くあがり、あとに「この君を思うて太息し、労心を極めて懺々たるをのべる。

湘君は（私の解釈によれば）女神を恋うて、之を迎えようとして、「かの君をまてど来まらず。涙を流し、君をいたみ思う。せめて杜若の香草を下女におくり、しばらくさまようて心をなぐさめよう」という歌。

湘夫人は女神が男神を慕うて、「わが袖を江になげ、わが衣を漣浦にすて、みぎわの杜若をとつて遠い人におくろう」と嘆く歌。

大司命は恐らく少司命の女神を思うて、而も女神がだんだん疏くなるのをかなしみ、「愈々思うて人を愁えしめ

る」をなげく歌。

少司命は、忽ち来り忽ち去る男神の立派さをうたい、「悲しみは生別離より悲しきはなく、楽しみは新相知より楽しきはなし」と、わがもとに来ず、雲間の誰かに引き留められる相手をかなしみ、「風に臨んで悦として浩歌する」をいう。

東君は太陽が朝、東にのぼり、夕べ西に沈んで、夜の中に暗黒の中を東にまわる、之を巫女が歌舞してまつる歌。

河伯は愛する者を黄河の岸に遊び、去りゆく君を南浦に見送る歌。

山鬼は山中の妖精が自分を見すて、逢いに来ぬ人を恋い慕うてうたう歌。この歌の美しさは九歌の中でも最も美しい。

国殇は国の為に戦死した勇士をまつる歌。

礼魂は特に何の神をまつるといふのでなく、恐らく祭りの歌舞の終りにでも奏するものか。巫女が花束を持つて代るくおどるさま。

こう考えてくると、これらの歌の中、雲中君、湘君、湘夫人、大司命、小司命、山鬼などは皆、恋人を待てど至らず、或は来ても忽ちに去られて、その充たされぬ思をうたい、一種言うに言われぬ、いわばたそがれの薄明りのようなわびしさがたゞようているのではないか。こ

れをしも民間宗教の祭歌と言えるだろうか、祭祀の歌ならば、やはり神が降つて飲食し、楽しんでまつりをうけることが歌われるのが常ではないか。(東皇太一にはその形がある)。神を待てども遂に来ぬ、というような歌を祭りの巫女が歌ふのはふさわしいとは思えない。山鬼などに至つてはことにそういう疑をもつ。もとく山鬼が男を恋うという言い伝えはあつたであらう。しかしこの歌が山鬼をまつる歌だとは考えにくい。但しそういう伝説の神に扮して、一種演劇的な歌舞が行われたと見ることは可能である。たゞそれにしても、この九歌の大半にたゞよう、このみたされぬ心のやるせなさ、蕭条たる心境(そう感ずるのは私の主観にすぎぬだろうか)は如何。之を果して、たゞ愉快な歌といえようか。憂愁のひゞきがないから、屈原に関係ないとか、或は屈原の壮年の得意な時代のものだとか言えようか。もとよりこの九歌の中に、直ちに忠君とか、愛国とかの心を求めようとする旧説は不可である。しかしそれに反対せんがために、直ちにこの歌を楽しい民間祭祀の歌だと見ることに私は賛成しがたい。そしてこの憂愁のもつひびきこそ、やはり放逐中の屈原の孤独感、寂寥感と最も自然に結びつくのである。彼の離騷の中に、宓妃や有娥の女や、有虞の二姚を迎えようとして、いつも背かれ、妨げられ、せめて「榮華の未だ落ちざるに及んで、下女の語るべきを相ん」

とし、結局は「高丘の女無き」をかなしまざるを得なかつた心持ちと相通するものではないか。

こうした見方によつて、私は九歌というものは、もともと民間祭祀の巫歌になぞらえて、屈原が自分の訴えどころのない憂愁の心から、楚国の神々の伝説、信仰を歌い出したものだと思いたいのである。